



“利用者の声” 特集

本号の主な項目：図書館への感想、職員の雑感、新システムについて、新システムの感想、書評、図書館利用状況、エッセイ“私と本”、寄贈図書報告など

図書館への感想

1. 学生の声 ～私が図書館へ行く目的は…～

この短大に入学したばかりのころは、看護の専門図書が半数以上を占め一般図書が少ししかないことに近寄りたがたい雰囲気があった図書館も、今では毎日の短大生活には欠くことのできない場所となってきた。私が図書館に行く主な目的は新聞を読むためである。2年生になったころから、私の周りの友達が図書館の新聞をよく読みに行くようになり、私もそれにつられて図書館へ行く回数が増えてきた。図書館には朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、新潟日報、上越タイムスなど複数の新聞がある。私は自宅に新聞を取っているのだが、他の新聞を読むのはまた楽しいなど感じている。自分の取っている新聞にない面白い特集などがあると、つい夢中になって読んでしまう。「新聞なんて1つをしっかりと読めば十分だ。」という人もいるかもし

看護学科2年生 浜島 真咲

れない。しかし私は、面白くてためになるような情報はできるだけ知っていたいという気持ちがあるので、欲張りだとは思っているが1つ自分の取っていない新聞を選んで読んでいるのである。

テスト前などは勉強をによく図書館へ行く。その時いつも思うことは開館時間がもう少し長ければいいのに、ということである。ここには参考図書が豊富に揃っているということもあるし、静かで落ち着ける雰囲気の図書館であるということもあって時間を忘れて勉強に集中することができる。また、テストが1時間目からあるという時は、朝図書館で少しでも勉強できればいいなどと思うこともよくあるので、そこを少し検討してもらえればと思っている。

2. 学外者の声 ～図書館の便利なところ～

私は、看護研究の資料集めで、6月に初めて図書館を利用しました。第一印象は、とても明るく静かで、落ち着く環境だと思いました。

実際に使ってみて、便利だと感じたのは、図書館所蔵検索端末が2台設置されており、それがいつでも、誰でも自由に開けることができる、ということです。それも、ほとんど待つことなく、また簡単に出来るのです。

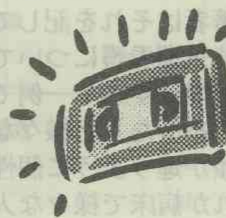
県立中央病院看護婦 矢野 千春

日常の勤務を終えて、図書館へ行くには、早くても6時を過ぎてしまうのです。そんな私たちには、6時から7時まで^注の1時間は、とても貴重な時間となります。検索をし、文献を探すまでスムーズで、集中して読む事ができるこの図書館にはとても感謝しています。

これからも、大いに利用させてもらいたいと思います。

注：平日は午後7時30分（土曜日は午後4時30分）まで開館しています。

としょかんあれこれ～職員雑感～ カウンターから見て、図書館を上手に利用している学生が多くなりました。開館当初は、科目試験、講義でのレポート提出等、与えられた課題についての学習、図書館利用が目立ちましたが、最近は入学後間もない1年生から、自分の興味のあること、研究テーマを見つけて取り組む学生が目立つようになりました。新しいシステムに替わり、医中誌 CD-ROM 検索も可能になり、文献検索、より詳しい情報の収集が可能になりました。文真摯な姿に接し、こちらから質問された事、求められている情報確かな情報を提供し研究の手助けとなるよう努力したいと思ひ書館には約780本ものビデオが所蔵されています。専門ビデオのための食事療法やダンベル等の身体運動、マザーテレサやと充実しています。一度、閲覧した人が病みつきになる程(?)ースが多いのも頭ずけます。一般利用者の方でビデオの閲覧のられます。「百聞は一見に如かず」是非、ご覧下さい。



文献を取り寄せ研究するについて、より多く正ます。最後に一言。図から、日常健康づくり HNK 特集、多種多様継続して閲覧されるケため来館される方もお (N)

図書館は何が変わったか!?～新システムについて～

5月下旬に図書館システムは更新され、いろんなところが変わりましたがそのすべてを皆さんはご存知ではないはず。「ただパソコンが薄くなっただけじゃないか。」と思っている人も多いのではないでしょう。いったい図書館のどこが変わったのか、目に見える部分と見えない部分にわけて説明します。

① 目に見える部分の変化

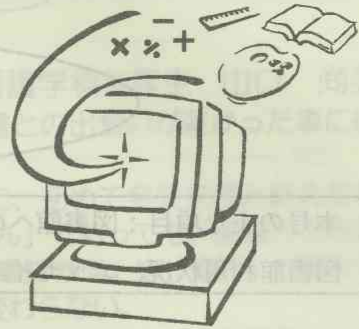
まず新しくなったことが一目瞭然なのはパソコン。液晶画面でスリムに、OSがMS-DOSからWindowsへ、利用者用検索端末は2台に増設し、所蔵検索画面もシンプルでグラフィックになりました。またインターネットや医学中央雑誌のCD-ROM検索が可能になり、検索結果をプリントアウトできるようになりました。

所蔵検索方法が簡単(キーワード入力場所が一つ)でスピーディ(処理速度の向上、検索台数の増設)かつ分かりやすい画面になったおかげで操作法の質問をされる人や検索待ちの人数が減りました。

またインターネット、CD-ROMが使えることで短時間で今までより多くの情報収集が可能になり、学生からの文献複写取り寄せの申込みも少しずつ出てきています。利用者の学習・研究活動により役立つシステムへと進歩しました。

② 目に見えない部分の変化

文部省の学術情報センターのNACSIS-CATに参加することになりました。これは全国の大学図書館や大学附属の研究機関などと協力して一つの目録を作るという作業で、その目録は“Webcat”という名でインターネット上で公開されています(<http://webcat.nacsis.ac.jp/>)。そこではある本や雑誌をどこの大学が持っているかを調べることができます。まだ参加したばかりで当館の蔵書は登録されてませんが、いずれは図書館外からの所蔵検索がインターネットを通じて可能になるのです。(Y)



新システムの感想

医学中央雑誌の文献検索が研究室でできるようになって 講師 渡辺 典子

研究活動において、文献検索は欠かせないものです。このテーマの領域でのどのレベルまで研究が進んでいるのだろうか?自分の持っている問題意識は新しいのか?研究の手法はどんなものがとられているのだろうか?等、文献検索は、研究の道標を示してくれるものです。以前は、図書館の開館時間にあわせ、誰か



が使っていれば使うことができず、少し休みたいと思ってもせっかく来たのだからと無理をしたりしていました。しかし、この検索を自分の研究室に居ながらにしてできるということは、研究時間のロスタイムを大いになくし、having a cup of coffeeで適度に休みながら検索が可能ということです。こうなれば、研究活動もよりはかどるといえるものではないでしょうか。

書評『看護のなかの死』

寺本松野 著 日本看護協会出版会 1998 (請求記号: N01.3-Te53)

助教授 山本 澄子

この本は昭和60年に第1刷に始まり、平成10年には第16刷発行を数えている。

著者である寺本松野女史は熊本で生まれ、看護婦養成所を卒業し、病院に勤務経験のある看護婦である。そして修道女でもある。別に宗教的要素が云々ということではない。この本の魅力は誰でも手軽に読めること、感動をよぶこと、患者の死への過程を通して読者に創造性と思考能力を高められることにある。記されている内容は、がん末期患者を取り扱ったものがほとんどなので、がん患者の看護と受けとめがちであるが、著者はそれを記しているのではないと思う。また、終末期看護についてのみ述べているとも思わない。登場はすべて一例である。結核であったり、胃がんであったりと様々な疾患が登場するが、人それぞれ顔が違うように個性をもちあわせた患者である。それが病床で様々な人間模様を

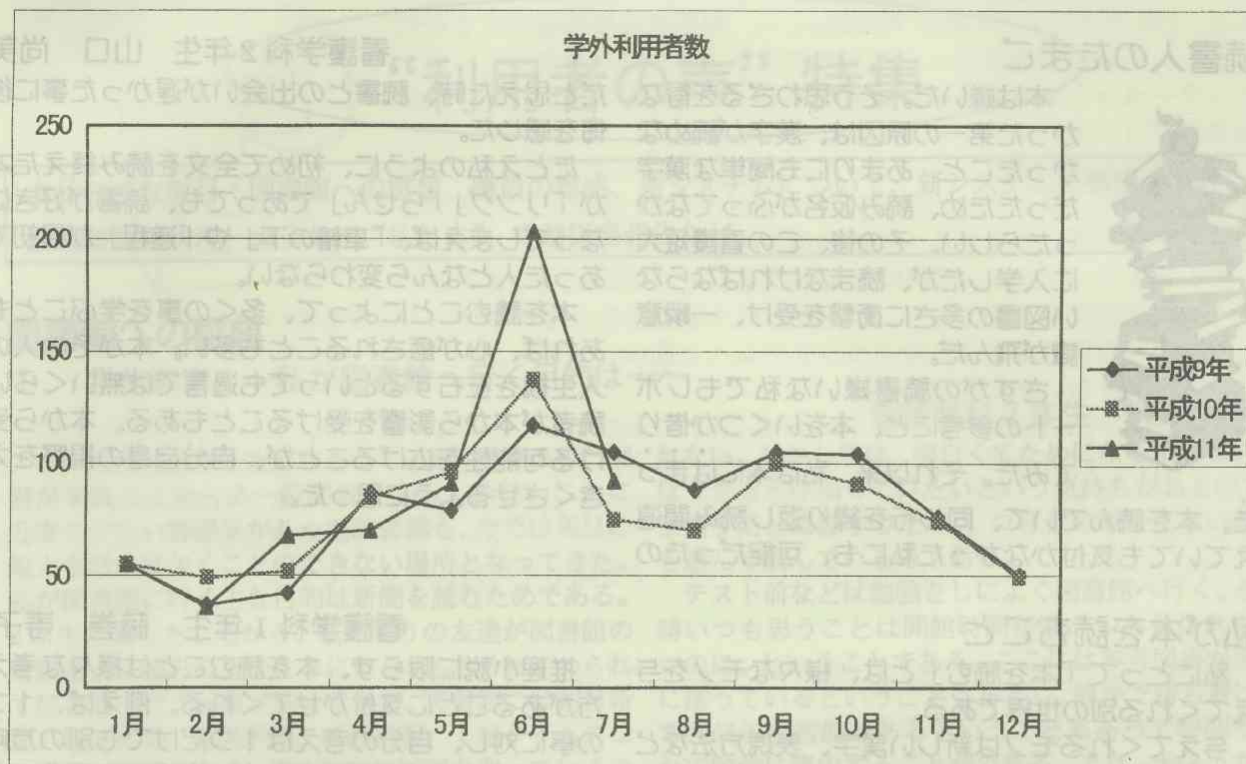
展開する。そこには決して看護と宗教に固執して問いかけているわけではない。読者の受けとめ(解釈も含めて)は自由裁量であるが、ある場面での患者と医療従事者との言葉の交わり、患者の心の動き・態度・様子、医療従事者の心の動きと対応から、読者に「見る」「護る」ことはどういうことなのかを考えてと寺本女史は投げかけていると感じ受ける。一般の単行本のようにスラスラと読める本ではあるが、「真の看護」を追求した一冊である。真摯に思考させてくれる本である。

授業で扱っている面白くも何ともない堅い本は、将来の看護専門職を目指す学生には、しっかり読んでほしいとは思っているが、時に息抜きでこのような本を読み、物事を真正面から受けとめることができ、かつ「考える」ことのできる看護専門職者になってほしいと願う。気軽に読めて思考能力と感性を与えてくれる本書の一読をお奨めしたい。

図書館利用状況

1 学外者の利用状況

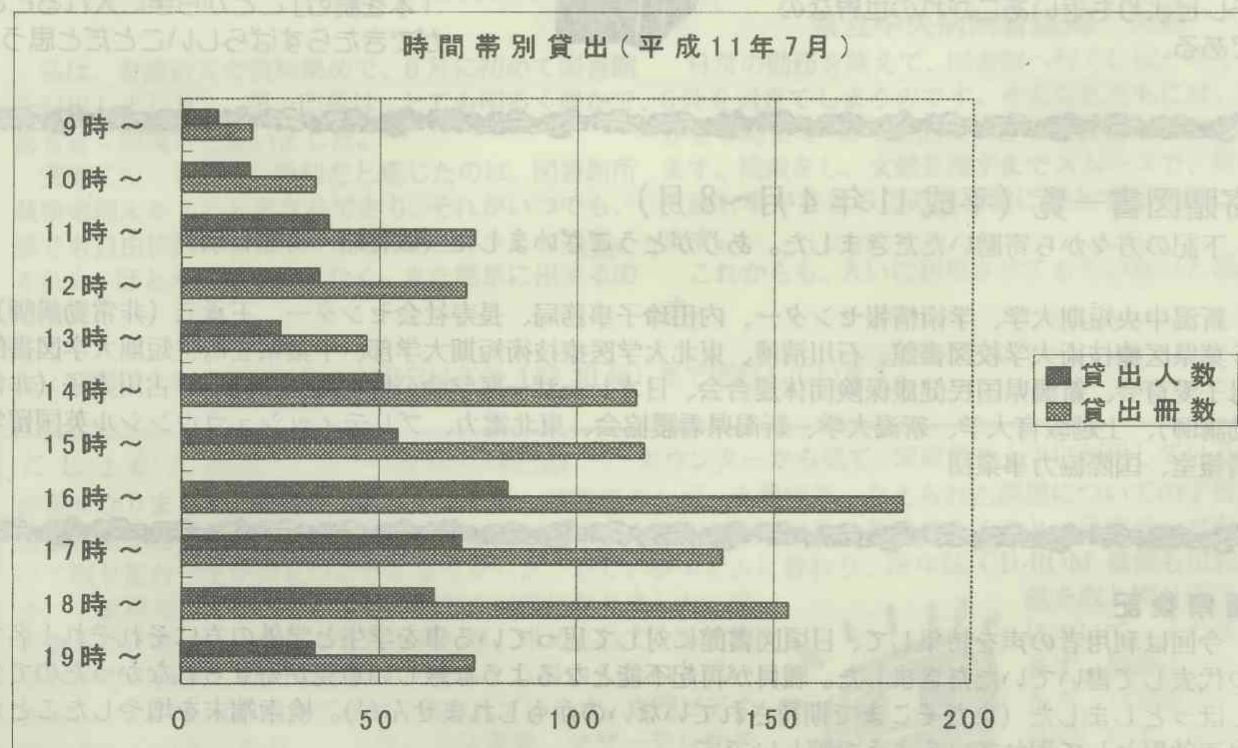
当館は学外者も利用できる図書館です。1年を通じて学外者の利用が多いのは6月で、今年の6月は特に多く、1ヶ月の学外者数としては過去最高の **203人** の利用がありました。また今年度に入って平日（土曜日を除く）の開館日にはほぼ毎日、学外者の利用があります。



2 利用者別貸出回数（4月～7月）

図書館では毎月初めに統計処理をしています。

その中では1日の中での利用状況を見る“時間帯別貸出”という統計も取っています。1ヶ月間をまとめて出しているのですが、先月は午後4時～5時までの間が最も多くなりました。



私と本

読書人のたまご



本は嫌いだ。そう思わざるを得なかった第一の原因は、漢字が読めなかったこと。あまりにも簡単な漢字だったため、読み仮名がふってなかったらしい。その後、この看護短大に入学したが、読まなければならない図書の多さに衝撃を受け、一瞬意識が飛んだ。

さすがの読書嫌いな私でもレポートの参考にと、本をいくつか借りてみた。それ以来、私は本にはまった。本を読んでいて、同じ行を繰り返し読み間違えていても気付かなかった私にも、可能だったの

看護学科2年生 山口 尚美

だと思えた時、読書との出会いが遅かった事に後悔を感じた。

たとえ私のように、初めて全文を読み終えた本が「リング」「らせん」であっても、読書が好きになってしまえば、「車輪の下」や「道程」が最初であった人となんら変わらない。

本を読むことによって、多くの事を学ぶこともあれば、心が癒されることも多い。本がその人の人生観を左右するといっても過言では無いくらい、読者が本から影響を受けることもある。本から受ける可能性を広げることが、自分自身の視野を大きくさせるように思った。

私が本を読むこと

私にとって「本を読む」とは、様々なモノを与えてくれる別の世界である。

与えてくれるモノは新しい漢字、表現方法などの知識であったり、想像力であったりする。特に今までは、推理小説を読むことが多かったので、テレビドラマをみているような気分で、そして時には小説のなかの誰かになりきって読むことがあった。だから、私にとっては、テレビよりも近いあこがれの世界なのである。



看護学科1年生 藤巻 寿子

推理小説に限らず、本を読むことは様々な考え方があることに気付かせてくれる。例えば、1つの事に対し、自分の考えは1つだけでも別の方向から考えれば、もっと違った考え方ができるということなどである。

これを含めて、私がこれから学ばなければならないことが看護においても社会においてもまだまだ沢山ある。そのなかで、少しでも役立つ何かを「本を読む」ことから手に入れることができたら素晴らしいことだと思う。

寄贈図書一覧（平成11年4月～8月）

下記の方々から寄贈いただきました。ありがとうございました（敬称略・寄贈日順）

新潟中央短期大学、学術情報センター、内田玲子事務局、長寿社会センター、王承云（非常勤講師）、千葉県医療技術大学校図書館、石川清博、東北大学医療技術短期大学部、千葉県立衛生短期大学図書館、母子愛育会、新潟県国民健康保険団体連合会、日本レーザー医学会公開討論会事務局、古川素子（非常勤講師）、上越教育大学、新潟大学、新潟県看護協会、東北電力、ブリティッシュカウンシル英国留学情報室、国際協力事業団

編集後記

今回は利用者の声の特集して、日頃図書館に対して思っている事を学生と学外の方にそれぞれ1名ずつ代表して書いていただきました。職員が再起不能となるような厳しい意見が寄せられなかったのが少しほっとしました（まだそこまで期待されていないのかもしれませんが）。検索端末を増やしたことが早速効果として現れているようで嬉しいです。

これからも“静かで落ち着いた雰囲気”を保持できるよう目を光らせていきますので、皆さんもご協力をよろしく願います。また、開館延長以外にも図書館へのご意見ご要望がありましたらどしどしお寄せください。電子メールでも受付ます。tosyo@niigata-cn.ac.jp (Y)